

教職課程における「教職に関する科目」と 「教科に関する科目」の連携Ⅱ —地域教材「岡部六弥太忠澄」に着目して—

A Study of Cooperation between "the Subjects concerning Teaching Profession" And "the Subjects concerning the Specific Field of Profession" in a Teacher-Training Course II — Focusing on the local teaching materials, "OKABE Rokuyata Tadasumi" —

佐藤由美*¹
Yumi SATO

田中信司*²
Shinji TANAKA

序

本稿は、教職課程における「教職に関する科目」（以下、「教職科目」と略す）と「教科に関する科目」（以下、「教科科目」と略す）の連携について、地域教材に着目して検討を行うものである。「教職科目」と「教科科目」の連携の必要性については前稿¹⁾で述べた通りである。学習指導要領が示すように、中学校社会科歴史的分野では、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」（下線筆者：以下同じ）を目標として掲げている。

教職科目「社会科教育法」（佐藤担当）では、この「身近な地域」と社会科の単元をうまく関連づけた授業ができないだろうかと試行錯誤を繰り返してきた。中学校社会科地理的分野には「身近な地域の調査」の単元があり、教科書には事例として静岡県静岡市（東京書籍）、東京都八王子市（帝国書院）、愛知県名古屋市（教育出版）が掲載されている。これらを範として埼玉工業大学のある「岡部」²⁾の教材化を考えて資料集めをした時期もあった。中学校社会科の教職課程を履修する学生たちが、大学の主催する「学生プロジェクト」に応募し、商工会議所や農協、岡部駅、地域の農家や商店の方々に取材して岡部クイズ集³⁾を作成したこともある。残念ながらこの成果を社会科単元に位置付けた学習計画を作成するまでには至らなかったが、このときの収穫の一つとして、岡部には「一の谷の戦い」に参戦した武将、岡部六弥太忠澄が存在することがわかった。これを歴史的分野の授業で教材化することはできないだろうか、それが次の課題となって残っていた。

教科科目「日本史概論」「日本史特講」（田中担当）では、中世の一武将の研究としてこれを取り上げることが可能であり、田中の専門領域でもある。教職学生が教科科目でこれを学んだ後に、教職科目で授業づくりに入ったなら両科目の連携が功を奏すに違いない。本稿は、いずれ学生による教材化、授業

*1 埼玉工業大学人間社会学部情報社会学科

*2 埼玉工業大学人間社会学部非常勤講師

計画の作成が為されることを念頭にした試論である。第1節「中学校社会科歴史的分野における地域教材の位置」を佐藤が、第2節「岡部六弥太忠澄とその後の岡部氏」を田中が執筆する。

1. 中学校社会科歴史的分野における地域教材の位置

岡部の武将、岡部六弥太忠澄は一の谷の戦いに参戦した。岡部地域をはじめ深谷市の中学生はそのことをどの程度知っているだろうか。または小学校や中学校の社会科の授業で取り上げられたことがあるだろうか。岡部駅前には史跡の案内板があり、後述されるように縁の史跡もあることから岡部六弥太忠澄の名前ぐらいは知っているだろう。しかし、源氏が台頭し平氏が滅びる鎌倉時代のはじまりの時期に、平氏追討の源氏方の武将として岡部の武将が参戦していたという文脈ではどうだろうか。

(1) 学習指導要領にみる学習のねらい

学習指導要領中学校社会科歴史的分野の目標は4項目から成る。このうち、地域教材との関連の深いのが、「(2) 国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる」と、序でも述べた「(4) 身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」である。人物の学習については、「人物の活動した時代背景と地域とを関連させながら、その果たした役割や生き方を具体的に理解させる必要がある」こと、また、身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を取り上げることで「その時代の様子を実感させ、生徒の歴史に対する興味・関心を高めることが求められる」とも解説されている⁴⁾。

中学校社会科歴史的分野はその内容を大きく六つに区分している。

- (1) 歴史のとらえ方
- (2) 古代までの日本
- (3) 中世の日本
- (4) 近世の日本
- (5) 近代の日本と世界
- (6) 現代の日本と世界

(2)~(6)は時期区分に依るものであるが、(1)は歴史の学習に対する向き合い方を学ぶ内容となっている。そして、ここでも「身近な地域の歴史を取り上げることによって、地域への関心を育て、我が国の歴史により具体性と親近感をもたせながら、その理解を深めることが大切である」と繰り返されている。さらに、博物館や郷土資料館などの利用も推奨されている。地域教材の利用により歴史理解に具体性を持たせること、そのことが地域への関心や歴史への親近感にも繋がるというわけだ。歴史は全般に「暗記科目」と敬遠され、その真の楽しさや醍醐味を伝えづらい。何とか歴史的分野の学習に一石を投じたいものである。地域教材は正にそこに位置づき、その役割を果たすだろう。

(2) 教科書の構成と叙述

さて、本稿が取り上げる地域教材「岡部六弥太忠澄」が登場するのは中世の日本である。平安の貴族の時代から鎌倉の武士の時代への転換点、平氏から源氏へ、西国から関東へと政権が移行する端境期である。教科書の叙述はどのようになっているのだろうか。教科書会社によって章立てや内容の区切り方、節や項の名称に個性がある。ここでは岡部忠澄が活躍した一の谷の戦い（平氏の滅亡）の取り上げ方を4社の教科書で見てみよう。次の〈表1 教科書の章立て〉を参照されたい。網かけをした部分に平氏の滅亡が叙述されている。周知のように中学校の教科書は見開き（2頁分）で一まとまりの学習内容となっており、そこに資料や図表も掲載されていることから文章部分は限られる。表1で言うと、各社とも「項」に2頁分が割かれ、小項目の①～④はその2頁内に収められている。したがって、清盛の死後、平氏が都落ちし、一の谷、屋島、壇の浦と追討され滅亡に至る過程を描く紙幅はない。さすがに「壇の浦」（壇ノ浦）の地名は4社の教科書に登場するものの、「一の谷」（一ノ谷）の表記があるのは、平氏中心の紙面構成をしている清水書院の教科書のみであった。

〈表1 教科書の章立て〉

出版社	東京書籍	教育出版	帝国書院	清水書院
章（部）	中世の日本	中世の日本と世界	中世 武家政権の成長と東アジア	中世の日本と世界
節（章）	武士の台頭と鎌倉幕府	世界の動きと武家政治の始まり	武士の世の始まり	武士の政権と東アジアのうごき
項（節）	武家政権の成立	いざ鎌倉	朝廷と結びつく武士	平氏政権と日宋貿易
小項目①	源平の争乱	源平の争いと平氏の滅亡	摂関政治から院政へ	平氏の政権
小項目②	鎌倉幕府の始まり	鎌倉幕府の成立	平氏の政治と日宋貿易	清盛と日宋貿易
小項目③	執権政治	御恩と奉公	源平の争乱と平氏の滅亡	平氏の滅亡
小項目④		武士の暮らし		

深谷市の中学校で使用している東京書籍の教科書の叙述は以下のようになっている。

栄華をほこった平氏でしたが、朝廷の政治を思うままに動かし始めたため、貴族や寺社の反感を招き、地方の武士の中にも、平氏のやり方に不満を持つ者が増えました。こうした中、清盛が後白河上皇の院政を停止させると、やがて諸国の武士が兵をあげました。なかでも源頼朝は、鎌倉（神奈川県）を本拠地に定め、武士を結集して関東地方を支配すると、平氏をたおすために弟の源義経などを送って攻めさせました。義経は平氏を追いつめ、ついに壇ノ浦（山口県）でほろぼしました。（漢字のルビは略す）

たしかに一の谷の戦いの表記はないが、岡部六弥太忠澄を登場させるチャンスはある。下線を付した部分であるが、平氏のやり方に不満を持った地方の武士とは具体的に誰なのか、関東地方を支配した頼朝が結集した武士とは具体的に誰なのか、一括りになっている地方の武士を紐解けば、地域の歴史上の人物が個性をもって現れてくる。まさしく地域教材の利用により歴史理解に具体性を持たせること、そのことが地域への関心や歴史への親近感にも繋がる事例となるであろう。但し、それには岡部六弥太忠澄についてできるだけ正確な知識を持たなければならない。どのような史料・史跡があるのだろうか。伝承されている内容の信憑性はどのようなのだろうか。

2. 岡部六弥太忠澄とその後の岡部氏

文明18年（1486）当時、修験道本山派を統轄していた聖護院道興は、教線の維持を目的として京都を発ち、東国・奥州を巡る旅行の途にあった。信濃国より関東に入った道興は、武蔵国岡部を訪れて以下のような文と歌を残している。

岡部の原といへる所はかの六弥太といひしものゝふの旧跡なり。近代関東の合戦に数万の軍兵うち死にの在所にて。人馬の骨をもて塚につきて。今に古墳あまた侍りし。しばらくゑかうしてくちにまかせける。

なきをとふをかへの原の古つかに秋のしるしの松風そふく（『廻国雑記』）

ここに見える「六弥太」とは、道興の時代をさらに遡った12世紀にこの地を治めていた鎌倉武士、岡部忠澄のことである。忠澄の名は、三百年以上の時を経て、都人たる道興の中にも確実に刻まれていた。ところが、現在の我々の中で、岡部忠澄を知るものがどれほどいるだろうか。確かに、忠澄の武勇譚は『平家物語』の中のひとつのクライマックスである。ただ、そこに描かれた以外の忠澄を語ることのできるものとなると、きっとその数は多くないはずである。これは、今、忠澄ゆかりの地である埼玉県深谷市岡部周辺に暮らす人々にも例外ではないと思う。そこで本節では、史料に登場する忠澄や岡部氏の動向、今の岡部の地に残る忠澄や岡部氏の痕跡を紹介していきたい。岡部を中心とする郷土の歴史に触れるための、ひとつの手立てとなれば望外である。

(1) 岡部忠澄

古代律令制は徐々に弛緩し、9世紀ころになると地方の治安は乱れるいっぽうであった。地方に国司として赴任した貴族は治安維持のために武装化し、それにとまって地域支配力も強め、所領の開発領有を進めて在地に土着するものもあらわれた。これらの勢力は軍事貴族と呼ばれ、やがて武士団形成の核となっていくのである。特に、台地の広がる関東地域は、国内屈指の良馬の生産地であり、これら牧の経営や馬術の技能などを梃子にした武士勢力の成長が顕著であった。とりわけ、武蔵国には土着した中央貴族を起源に持つ「武蔵七党」と呼ばれる武士団が形成され、各地に勢力を根付かせていった。

その武蔵七党のひとつが、猪俣党である。猪俣党は、平安初期の京都において官吏・文人として活躍した小野^{たかむら}篁をその祖にするとされ、武蔵国那珂郡（現埼玉県本庄市）を中心に勢力を誇っていた。岡

部氏は平安後期に猪俣忠兼の子、忠綱が武蔵国^{はんざわ}榛澤郡岡部（現埼玉県深谷市）の地を所領として譲り受け、岡部氏と称したことにはじまる。岡部六弥太忠澄は、その忠綱の孫にあたり、12世紀初頭より岡部氏の惣領をつとめていたとされている。

その忠澄を世に知らしめる契機となったのが、源氏と平氏の内乱に他ならない。猪俣党は、保元の乱（1156年）の勃発に際し、猪俣小平六（金平六）範綱（則綱）のもとで源氏の棟梁源義朝の麾下に参じているが、忠澄は首領の範綱よりも先に、猪俣党の筆頭にその名が記されている（『保元物語』）。その他、猪俣党の一員として参じた武士には、^{かく}可句氏・^{てぼか}手薄加氏があったことが分かる（『保元物語』）。可句氏については明確にならないが、^{かみてぼか}手薄加氏は、岡部の北方に位置する今の深谷市^{しもてぼか}上手計・下手計周辺を領していた武士と見て間違いない。そして、保元の乱に引き続いて起こった平治の乱（1158年）においても、猪俣党は源氏方として参戦している。なかでも、待賢門を舞台にして源義平（義朝の嫡子）と平重盛（清盛の嫡子）が激突した戦闘において、忠澄・範綱は、重盛の陣に突撃する義平の後に続く「十七騎の兵」に列している（『平治物語』）。「十七騎の兵」の顔触れを見てみると、斉藤実盛・熊谷直実・土総広常ら、源平の戦いを代表する関東武士の歴々が揃っている。この部隊は、たったの十七騎で五百余騎の平氏方を待賢門より退かせている（『平治物語』）。忠澄は、源氏軍の精鋭中の精鋭であったことを如実に示した事例だといえる。

しかし、平治の乱は、最後は平氏方の勝利に帰し、義朝はじめ源氏方は京を追われることになる。義朝は近江国坂本の地において、二十騎ほどにまで減ってしまった配下に暇を与え、東国に帰らせた。忠澄・範綱らもここで義朝と別れ東国に没落していった。その後、義朝は尾張国において殺害され、義平も捕縛されたうえ、京都にて斬首となった。源氏はひとたび歴史の表舞台から姿を消し、平氏政権の時代に移る。源氏に与していた関東の武士も平氏への従属を余儀なくされるが、忠澄はじめ猪俣党の面々も不遇の時期にあったと思われる。

『平家物語』によると、治承4年（1180）9月、都の平清盛のもとに源頼朝挙兵の報が届く。このとき、武蔵国の武士畠山重忠は三千人の軍勢を率いて頼朝に味方し、平氏方の三浦義明を討ち取ったが、この武蔵国の三千騎の中に「七党の兵ども」も含まれていた。岡部忠澄も源氏方として再度活躍の場を得たといえる。やがて都の平氏勢力は、源頼朝に先んじて信州・北陸より都に入った木曾義仲（頼朝の従兄弟）に破れて西国に没落し、それにより復権した後白河法皇と義仲の対立という新しい構図を生んだ。朝廷の要請をうけた鎌倉の頼朝は、弟の範頼と義経を総大将にたて義仲討伐の兵を都に向けて派遣したが、猪俣党もこれに従軍し、義仲勢との初戦である宇治川の戦いでは範頼麾下の将として猪俣範綱が先陣をきっている。忠澄も範綱とともにあったと想像される。

その後、近江粟津において義仲を滅ぼした源氏軍は平氏討伐のため西国に軍を向け、寿永3年（1184）2月、摂津国福原近郊にて合戦となった。源義経の逆落として有名な一の谷の戦いである。この時、範綱や忠澄は源氏方として従軍してはいたのだが、『平家物語』には範頼・義経麾下の侍大将としてその名があらわれない。猪俣党をはじめとする武蔵七党の諸家は、範頼の率いる大手軍に属して戦ったよう（同じ時期を描く軍記物語である『源平盛衰記』では、義経率いる搦手の属将として忠澄・範綱ともに名が挙がっている）だが、保元・平治の乱の時期と比較して、総じて武蔵七党の地位が低まっているような印象をうける。それに対して、畠山重忠や梶原景時など、頼朝との結びつきの強い武士勢力の台頭が目覚ましくなる。

が、そのような武蔵七党の一員である岡部忠澄は、この戦場で大きな勲功を挙げるのである。すなわち、平氏方の将領のひとり、平薩摩守忠度を討ち取ったのである。清盛の異母弟である平忠度は、富士川の戦いをはじめとした源平合戦の諸戦を指揮し、文人としても著名な平家の重鎮で、一の谷の戦いにおいても西手の総大将をつとめていた。

一の谷での平氏敗北を受け、戦場を離脱しようとする忠澄を見つけた忠澄は、これに追いつき一騎打ちとなった。『平家物語』は、その模様を詳細に記している。それによると、忠澄は、忠度の「大ぢからのはやわざ」の前に劣勢で、忠度に散々斬り立てられて落馬させられたうえに一太刀浴びて負傷するが、駆けつけた忠澄の郎党が横様から忠度の右腕を切り落としたため、辛くも忠度の首を挙げる事ができたのである。忠澄は、はじめは相手を誰かも知らずに挑みかかったのであったが、相手の籠えびら（矢を入れて背中に背負う道具）に結びつけられた一首の歌から、それが忠度であることを知ったという。忠澄は大音声で敵の大將を討った名乗りを挙げたが、実際は忠度の武勇の際立つ戦いであったといえる。さらに、名將忠度の死の報に、敵味方の皆が「涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり」という有様で、ここを読む限りでの忠澄の印象は決して芳しいものとはいえないが、この働きによってその名は後世にまで語り継がれていくのである。

また、忠澄と同じ猪俣党の猪俣範綱も、この戦場で平氏方の猛將である平盛俊を討ち取っている。が、ここでも範綱は、かえって盛俊の剛力の前に組み臥されて首を搔かれそうになっており、盛俊に命乞いまでするありさまであった。そして、盛俊は範綱を解放するのだが、範綱はわずかに視線を逸らせた盛俊のすきを突いて、これを討ち取ったのである。「日来鬼神と聞こえつる」盛俊を討った範綱は、この戦での殊勲者の筆頭に名が記される栄誉を得たが、その手柄はだまし討ちによるものであった。

ところで、ここまで忠澄と範綱の活躍を挙げてきたが、そもそも、古典文学作品として位置づけられている『保元物語』や『平家物語』は、必ずしも歴史的事実を正確に著述したものではないことには留意すべきである。特に『平家物語』の研究において、忠澄最大の活躍の舞台であった一の谷の戦い自体が、実際の地理的条件などとは整合性のとれない戦場空間を描き出していること（鈴木彰 2009年）や、平氏敗北の必然性が作品の基調として設定されていること（川合康 2009年）などが指摘されている。つまり、史料として『平家物語』に接してみると、忠澄と忠度、範綱と盛俊の対決の流れ（卑怯な手段の使用）が展開として近似している点に、一程度の作為性を感じざるを得ないのである。

ただし、それが作為とはいえ、卑怯な手段を用いてまでして平家の将星を討ち、戦場での戦功を追求する源氏武士の代表例として、いずれも猪俣党の武士が用いられたことに、当時（少なくとも『平家物語』成立時）の猪俣党、ひいては武蔵七党に対するイメージが投影されているといえなくもない。すなわち、源平の戦いが決着に向かい、鎌倉幕府が武家政権としての体裁を整え、関東を中心とした新しい武士の秩序が生まれる中で、武蔵七党は、武士政権の執行に与る存在としてよりも、もっぱら戦場を活躍の場とし、軍功に執着する「兵隊」としての位置づけが強まっていくように思えるのである。平安期には、京都貴族の下向勢力として一程度の貴種性を有していたともいえる武蔵七党の面影は、鎌倉期にはかなり薄まっていたとすることができよう。

ちなみに、猪俣党の本拠である埼玉県から遠く離れた、神奈川県は三浦半島、葉山町の杉山神社付近の路傍には、猪俣範綱と岡部忠澄のものと伝えられる墓がある。そして、伝承によると、一の谷合戦で卑怯な戦いをして故郷に帰れなくなった両人が、この地を領していた源頼朝の重臣、三浦義澄を頼った

もののこの地で自殺したという。この話は、総合的に見て到底歴史的な事実とはいえない。が、『平家物語』で描かれた猪俣・岡部の戦いぶりを、卑怯さの象徴として認識する風土が確実にあったことや、『平家物語』が巷間に強く流布されていったありようを如実に物語っているようで興味深い。

では、軍記物語や伝承でなく、より歴史的な真実を語っている史料的高価値の文献には、岡部忠澄はどのように記されているのだろうか。たとえば、鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』を開いてみると、それが皆無に等しいことを知らされる。すなわち、文治3年(1187)段階で伊勢国かひやすとみ弼安富名を領有していたこと、同5年7月の頼朝の奥州征伐で頼朝本隊の一員として従軍していること(従軍している御家人の交名144名中125番目に記載)、建久元年(1190)の頼朝の上洛に際し頼朝本陣に供奉する138名の中に名を連ねていること、これが岡部忠澄の活動の全てなのである。これは武蔵七党の武士に総じていえることだが、忠澄は鎌倉幕府に属する大勢の御家人の中のひとりとして、その固有の姿を埋没させてしまうのである。そして、忠澄以降の岡部一族が鎌倉幕府の要職につくことも認められないのである。冒頭で挙げた聖護院道興の忠澄への感慨も、その実態のある威名によってというよりは、やはり、『平家物語』の流布の力強さによって生み出されたものとすべきだろう。

(2) 岡部忠澄の遺跡

『平家物語』の中でも、決して堂々たる戦いぶりで敵の首級を挙げたわけでもなく、また、鎌倉幕府御家人としての目覚ましい活動の事績を伝えたわけでもなかった岡部忠澄。しかし、現在の埼玉県深谷市・旧岡部町域には、数多くの忠澄にまつわる遺跡・遺物が残されている。むしろ、これを知ることが、岡部の地に生きた忠澄の真の姿に近づく手立てになるといえるだろう。ここでは、それら忠澄ゆかりの諸々を紹介していこう。

J R深谷駅から15分ほど線路沿いを西に歩いた、深谷市萱場の地に清心寺がある。この寺院は、戦国期に深谷周辺を支配していた深谷上杉氏の家臣であった岡谷清英が開基となって、天文18年(1549)に建立されたといわれている。そして、この境内へ通じる入り口の脇に、忠度塚と呼ばれる高さ1メートル強の五輪塔が安置されている。五輪塔とは、上から空・風・火・水・地を表す五つの部品を重ねて作られた仏塔で、前近代にはおもに墓石として用いられていた。五輪塔は、その形状の特徴などから大体の制作年代を知ることができるが、忠度塚は中世期の成立と見なしてよいと思われる。そして、そのかたわらの説明板には、一の谷の戦いで平忠度を討ち取った忠澄が、その供養のために建立したとある。これは、江戸時代後期に江戸幕府昌平坂学問所が編纂した地誌である『新編武蔵国風土記稿』にも記されていることで、これによると、本堂の北東方向に忠度桜と呼ばれる桜の木があり、このもとに梵字を刻んだ五輪塔と、青石の板碑(石板で作られた供養塔)があったことが分かる。たしかに現在にも五輪塔の脇には、上部が破損した板碑の一部が安置されており(写真1)、江戸時代の風景と変わらない姿を現在にとどめている。

さて、この忠度塚であるが、その説明板には「忠澄の領地の中で一番眺めのよいこの地に」建立した旨が書かれている。『新編武蔵国風土記稿』にも、忠度の「菩提の為に当所に墓を立」(傍点筆者)とある。これらを踏まえると、岡部忠澄が築いたその最初から、今の清心寺の境内に五輪塔が変わらず安置され続けていることをうかがわせるようである。ただし、岡部の地よりも深谷の地に近い場所に忠度塚があることには不可思議さを感じる。また、12世紀ころに忠澄が忠度塚をここに築いて宗教的な拠点に

したとして、その数百年後の16世紀に、わざわざこれに重複させ、境内に含みこませるように岡谷清英が清心寺を建立したことにも違和感を覚える。そのなかで、明治期に作成された地誌である『武蔵国郡村誌』に、本来は忠澄が「岡部の原」に設置した忠度塚を、岡谷清英が清心寺を建立する際に境内に移転させたことが記されているのは興味深い。冒頭に挙げた『廻国雑記』にもある「岡部の原(岡部原)」は、JR岡部駅から北に歩くこと約30分、深谷市普濟寺の菅原神社があるあたりと比定されている。ここは、萱場の地と比べて岡部氏の本拠地と極めて近い場所である。また、清心寺が建立された戦国期の当地の情勢を鑑みても、塚の移転が行われることにはむしろ整合性がある(詳しくは後述)。この『武蔵国郡村誌』の記事が作られるにあたり、典拠とされた史料は現状で管見に触れていないが、歴史的事態に即した内容であると判断される。ただ、いずれにしろ、中世の作成としては比較的大きな五輪塔の姿からは、忠度の供養を懇ろにする忠澄の慈悲深さを知ることができよう。

いま、岡部氏の本拠地が深谷市普濟寺を中心とする地域であることを述べたが、その根拠となるのが、当地の地名にもなっている寺院である普濟寺に他ならない。なぜなら、普濟寺はもともと岡部氏の居館にあたり、寺院としては忠澄が臨濟僧栄朝(日本臨濟宗の祖栄西の弟子)を開山に招いて建立した観音堂にはじまり、のちに忠澄の法号である普濟寺殿道海大禪定門をとって寺号としたものだからである(『新編武蔵国風土記稿』)。周辺を歩いてみると確かに土塁の跡や、堀の跡と思わしきものが形をとどめている。この堀の跡は、先に述べた菅原神社(「岡部の原」)のあたりに見られる。平忠度の五輪塔はもともと「岡部の原」にあったというが、おそらく、それは岡部氏居館の敷地内に営まれていたと考えるのが最も自然である。

普濟寺には忠澄にまつわる遺物として、忠澄夫妻の木像や忠澄所用と伝えられる兜が残されている。また、「岡部六弥太忠純伝」なる、忠澄の伝記がある。その内容を箇条書きにしてみよう。

- ・岡部忠澄(史料では忠純)は知勇兼備の名将であったが子宝に恵まれず悩んでいた
- ・禪門に入る前の栄朝は比叡山釈田房に入っていたが忠澄夫妻とは親交があった
- ・忠澄夫妻の懇願を受けた栄朝は「誕生有之秘法」を修し忠澄の妻は懐妊する
- ・生まれてくる子供が女子であることを栄朝から知らされた忠澄は落胆し「変生男子之秘法」を懇願する
- ・栄朝は「天台宗大秘密之法」である法を修し忠澄の妻は男子を出産するがその男子の乳房だけは女子のままであった
- ・栄朝は未熟な自分のみだりに「変生男子之秘法」を修したことを悔い比叡山を退く
- ・栄朝は栄西に従い禅宗を修める
- ・あるとき栄朝は「白牛」に導かれ上野国新田莊世良田(現在の群馬県太田市)の地に至りここに長楽寺を建立する
- ・長楽寺は関東最初の禅道場となり忠澄も長楽寺の檀越として「施捨財宝」を惜しまなかった
- ・忠澄は亡くなった後中国の仁宗皇帝(明の第四代皇帝か)として生まれ変わった
- ・仁宗皇帝は霊夢で自身の前世が忠澄であることと忠澄が長楽寺に帰依したために皇帝に転生できたことを告げられる
- ・仁宗皇帝は宝物を満載した大船三艘を長楽寺に向けて送る
- ・船は常陸国・相模国・奥州にそれぞれ到達する

・忠澄のあとも代々の子孫が長楽寺に帰依している

このように、忠澄の伝記というよりは、忠澄と栄朝との関係から長楽寺成立の濫觴をあらわした縁起としての性格が強い。その内容は、もちろん伝説の域を過ぎないものであるが、忠澄が当時日本に導入されて間もない禅宗に帰依し、関東屈指の禅宗寺院である長楽寺と深い関係を有していたことを明快に示している。事実、『新編武蔵国風土記稿』によると深谷市西島の瑠璃光寺、内ヶ島の永光寺、高畑の円応寺など、普濟寺に比較的近い位置にある寺院が長楽寺と本末関係を結んでいた事例がよく見られる。このことは、長楽寺の教線拡大のために岡部氏が果たしていた役割の大きさを物語っている。そして、このような宗教的結びつきを含め、岡部と長楽寺のある上野国新田莊世良田との間で盛んな人やものの交流が行われていたことは想像に難くない。実際今の道路地図を眺めてみると、普濟寺の境内に沿う南北道をそのまま北に延長させていくと、世良田の長楽寺の境内に到達するようである。この道沿いの石像遺物や寺院などを検証してみると、あるいは中世古道の姿が浮かび上がるかもしれない。

さて、この普濟寺にはもうひとつ、岡部忠澄にゆかりの遺物が遺されている。それは、岡部一族の墓といわれる1メートル前後の大きさを誇る五輪塔群である。『新編武蔵国風土記稿』には十三・四基の五輪塔が安置されている旨が記されているが、現在は、中心に置かれた忠澄の五輪塔(写真2)をはじめ、六基のみが存在している。いずれも中世の五輪塔と見て間違いはない。五輪塔の背後には、これも中世の板碑の断片が多数置かれている(写真3)。この地域が岡部氏の本拠地であり、文化的にも栄えていたことをうかがわせる。

ところで、これらの五輪塔だが、忠澄のものはさておき、その他の五基は風化が激しく原型をとどめていない。さらに、風化とだけでは説明できない、人の手によって削り取られたような痕跡がある。伝承によると、この墓石の粉を煎じて飲むと、子宝に恵まれない女子は子を授かり、乳の出ない女子は乳が出るようになったという。先に示した「岡部六弥太忠純伝」の内容も然り、この五輪塔の伝承も然り、さらには、普濟寺の東方にある源勝院の本尊である千手観音像は、忠澄誕生の際に乳の祈願をかけて靈験があったため「乳房観音」と称せられたという(『新編武蔵国風土記稿』)。この地において、忠澄は「安産」「子育て」の象徴として見られていたことは明白であろう。これは、『平家物語』にある武人像とは異なる、在地において慕われる忠澄の本来の姿を投影したものなのかもしれない。

さらに、忠澄に関わる遺跡として、普濟寺から南西に15分ほど歩いたJR高崎線の線路沿いにある愛宕神社が挙げられる(写真4)。一目見て分かるように、もともとは小さな古墳(円墳)であった上に神社が建てられていて、火防の神として忠澄の崇敬を受けていたとの伝承があるという(同社の案内板より)。また、『武蔵国郡村誌』によると、深谷市高畑の高畑社(現存はしていないと思われる)は忠澄の居館の鬼門防除の神社であったという。これらの遺跡や伝承を総合してみると、岡部忠澄の支配領域の中心は、その東西が今の深谷市普濟寺・岡部から高畑あたりまで、南北が高崎線の線路以北小山川以南であったと想像される。

この他に、忠澄の痕跡を遺す場所は、深谷市以外にも存在する。前項にて、『吾妻鏡』の中に忠澄が伊勢国粥安富名を所領としていた記事のあることを紹介したが、この粥安富名は現在の三重県鈴鹿市甲斐町にあたる。江戸時代前期に津藩士山中為綱が著した地誌である『勢陽雜記』には、忠澄が粥安富名を拝領後実際にここに移り住み、ここで亡くなったことが記されている。岡部氏の惣領である忠澄自身

が、本領の岡部を離れることは考えにくい。が、岡部氏一族の適当な者が代官として派遣されていたことは確実である。

(3) 忠澄以後の岡部氏

『新編武蔵国風土記稿』には、忠澄が建久8年(1198)に亡くなったことが記されている。そして、関東は、鎌倉幕府の本拠地として栄えた後、南北朝の動乱を経た室町幕府の成立後も首都京都と並ぶ重要地域として特別視され、幕府の出先機関として鎌倉府(鎌倉公方)が置かれて独自の支配が展開された。その中で、鎌倉公方足利氏とそれを支える筆頭の重臣である関東管領上杉氏との対立が顕然となり、関東には全国に先駆けて戦国動乱の波が押し寄せるのである。では、この情勢のなかで、忠澄以降の岡部氏はどのような道をたどるのだろうか。

ここで、今一度冒頭の『廻国雑記』を振り返ってみよう。そうすると、岡部原が忠澄の「旧跡」と記されていること、また、この場所で近年大きな戦いがあったことに気付く。この戦は、戦国期関東の争乱を記した軍記『鎌倉大草子』などに見える、康正2年(1456)に古河公方(鎌倉公方)と関東管領山内上杉氏が衝突したものを指す(第2項で記した深谷上杉氏は山内上杉氏から派生した一族である)。つまり、15世紀後半の戦国の争いの渦中で、岡部氏は岡部原周辺から姿を消しているのである。そして、この岡部原の戦いの際に、もともとは岡部氏居館の敷地内に営まれていた忠度塚が、深谷上杉氏の家臣岡谷清英によって萱場に移転されたと考えられるのである。

そのような鎌倉～戦国期の岡部氏について、一次史料からわずかにその足跡をたどることができる。徳治2年(1307)以前に、岡部三郎が上野長楽寺に寄進を行っていたことが分かる(「長楽寺文書」)。正和5年(1317)には、武蔵国三山郷(現埼玉県小鹿野町)をめぐる所領紛争において、岡部孫六入道が催促使(被告方の出頭を促す使者)をつとめている(「中村文書」)。これらからすると、鎌倉幕府末期の時点では、岡部を拠点とした岡部氏の活動があったことが理解できる。

元弘3年(1333)、鎌倉幕府は、幕府を離反して後醍醐天皇に与した新田義貞を総大将とした大軍の攻撃の果てに滅亡する。この時、新田軍の「侍大將軍」として岡部三郎が従軍していたこと(「有浦文書」)、同じく新田軍に岡部又四郎がいたこと(「石川文書」)が認められる。新田軍の幹部のような立場にある岡部三郎が、徳治2年ころに長楽寺に寄進した岡部三郎と同一人物かどうかは判然としないが、長楽寺のあった場所(世良田)が新田氏の本拠である新田荘内にあったことは大いに示唆的である。義貞は、門前市の栄える長楽寺を経済的要地として重要視しその掌握につとめたという(田中大喜 2011年)。そして、岡部氏は長楽寺創建に大きく関わる檀越の代表格である。長楽寺を介した新田氏と岡部氏のつながりは濃密なものがあったと考えて大過ないだろう。新田方に属する岡部氏の動向は、南北朝の動乱を描いた代表的な軍記である『太平記』にも見え、岡部出羽守が新田家の重臣である大館氏明の「執事」であったことが記されている。この出羽守は、江戸時代後期に作成された系図集である『寛政重修諸家譜』において実名が忠貞と比定されている。忠貞の「貞」は新田義貞から拝領した一字であると思われる、岡部氏が岡部の地を拠点にして新田氏と強く連携していたことをうかがわせる。

が、南北朝の動乱の中で南朝の主力であった新田氏は、足利尊氏率いる北朝(室町幕府)勢力に圧倒されて没落する。岡部氏もこの中で力を落としたと考えられる。岡部忠貞の子、新左衛門忠弘は、新田氏を離れて足利尊氏方に鞍替えし(『太平記』『寛政重修諸家譜』)、一族はそのまま鎌倉公方に仕えたよ

うである(『寛政重修諸家譜』)。岡部氏は滅亡こそは免れたものの、その家格を大いに下げたものを想像される。そしておそらく、この段階のいずれかの時期に代々の根拠地であった岡部を失ったものと思われる。

そして、『寛政重修諸家譜』によると、忠弘より七代後の右衛門三郎泰忠の時には、扇谷上杉氏(関東管領山内上杉氏の対抗勢力)の配下として、武蔵国高麗郡我野(吾野、現飯能市)に居住するも、戦国関東の雄である後北条氏に攻められて城を失い、その子惣十郎忠秀は高麗郡日影郷(現飯能市赤沢)に隠棲したという。その後、関東には江戸幕府が成り、忠秀の孫小次郎吉正は徳川家の旗本として取り立てられ、武蔵国都築郡(現東京都杉並区)に領地を得た。飯能市吾野や赤沢に近い下直竹^{しもなおたけ}にある長光寺は、吉正によって整備され、もともとここにあった岡部一族の墓が、吉正の領地である杉並の天慶寺に移されたという(『新編武蔵国風土記稿』)。そして、吉正は死後長光寺に葬られ(『寛政重修諸家譜』)、現在も長光寺の境内には、岡部氏ゆかりのものと伝えられる五輪塔や宝篋印塔などの石像遺物が安置されている。旗本岡部氏は、その源の地を、武蔵国榛澤郡ではなく高麗郡と見なしていたことが分かる。

以上、本節では忠澄をはじめとした岡部氏の中世を駆け足で見してきた。そこで第一に思うのが、中世末期の段階で岡部氏が、その本拠である武蔵国榛澤郡岡部とのつながりを断絶させてしまっていることである。このために、現在の我々に岡部忠澄の姿が見えにくくなっているのは残念である。そして、もちろん、その行跡を刻んだ史料に恵まれないことも、忠澄が歴史の中に埋もれてしまった原因である。が、しかし、埼玉県深谷市岡部周辺の郷土には、忠澄の息吹を感じさせる有形無形の痕跡が確実に遺されていることに価値を見出したい。これらに目を向けること、これらを今後に遺し伝えていくことを、郷土理解のために欠かすわけにはいかない。

結びに代えて

ここでもう一度、冒頭で述べた中学校社会科の目標を振り返ってみよう。「岡部六弥太忠澄」は目標に適った地域教材とは言えまいか。本稿には田中が踏査した史跡4点の写真を収録している。平忠度五輪塔と板碑、岡部忠澄五輪塔、板碑の断片、愛宕神社は岡部に現在も伝わる文化遺産である。五輪塔は中世のものと見て間違いないというから、800年以上、この地に存在していたことになる。これは歴史上の人物、岡部忠澄がこの地に存在していたことの証左となり、平家物語にある平忠度を討ってそれを供養したという逸話が真実かもしれないという期待感を与える。社会科の目標(2)が示す「歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる」に繋がる。目標(4)の「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め」るにも適っている。

しかし、田中が「古典文学作品として位置づけられている『保元物語』や『平家物語』は、必ずしも歴史的事実を正確に著述したものではないことには留意すべき」、また、「史料として『平家物語』に接してみると、忠澄と忠度、範綱と盛俊の対決の流れ(卑怯な手段の使用)が展開として近似している点に、一程度の作為性を感じざるを得ない」と指摘しているように、事実として認定するには史料的に懐疑や限界があるのだ。次いで田中は「より歴史的な真実を語っている史料的高い価値の高い文献には、岡部

忠澄はどのように記されているのだろうか。たとえば、鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』を開いてみると、それが皆無に等しいことを知らされると述べる。信憑性の高い文献には記述がないことを知らされ生徒は落胆するかもしれない。それではそんな岡部忠澄の遺跡がなぜ残っているのか。例えば清心寺にある忠度塚（五輪塔）、この説明板には、「一の谷の戦いで平忠度を討ち取った忠澄が、その供養のために建立した」とあり、これは江戸時代後期に江戸幕府昌平坂学問所が編纂した地誌『新編武蔵国風土記稿』にも掲載されていると田中は説明する。実はこれらのことも社会科の学習としては大きな意味を持っている。目標（4）の後半は「様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」と続いているからだ。①古典文学作品『保元物語』と『平家物語』、②鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』、③五輪塔と説明板、④江戸時代の地誌『新編武蔵国風土記稿』は目標のいう「様々な資料」である。これらを「多面的・多角的に考察し公正」に判断する教材として機能させればよいのだ。

さらに田中は遺跡や伝承を総合し、「岡部忠澄の支配領域の中心は、その東西が今の深谷市普濟寺・岡部から高畑あたりまで、南北が高崎線の線路以北小山川以南であったと想像される」と述べているが、このことも興味深い。中世の武将の支配領域を生徒に実感をもたせることができるからだ。また、岡部忠澄が平氏追討の戦に参加したことを知ることで、岡部地域が源頼朝の支配する「関東」に間違いなく位置づいていたこともより身近に感じるであろう。教職科目と教科科目の連携によって、このような地域教材の可能性をさらに開拓していきたいと考える。

[註]

- 1) 佐藤由美・田中信司「教職課程における『教職に関する科目』と『教科に関する科目』の連携—中学校社会科歴史分野「蒙古襲来」を事例として—」埼玉工業大学人間社会学部紀要 第13号, 2015年3月, pp.9~21
- 2) 埼玉工業大学の所在地、深谷市普濟寺は市町村の統廃合で2006年1月1日に花園町、川本町とともに深谷市に編入されたが、1968年12月の町制施行で岡部町、それ以前は岡部村だった。
- 3) 埼玉工業大学学生プロジェクト（岡部の魅力発見）『おかベクイズ100選』, 2012年3月, 全138頁
岡部町の歴史に関するクイズは、山口律雄『岡部町人物誌』（博字堂, 平成7年）、岡部町商工会青年部まちづくり委員会編『郷土再発見紀行ふるさと岡部』（平成14年）、岡部町町長公室『語りつぐ、岡部。』（平成17年）等の郷土誌から学んで作成されている。
- 4) 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』平成20年9月

[参考文献]

- 川合康「内乱の展開と「平家物語史観」」（同氏編『平家物語を読む』吉川弘文館 2009年）
鈴木彰「合戦空間の創出」（川合康編『平家物語を読む』吉川弘文館 2009年）
田中大喜「「得宗専制」と東国御家人 —新田義貞挙兵前史—」（同氏編著『シリーズ・中世関東武士の研究 第三巻 上野新田氏』戎光祥出版 2011年）



写真1 平忠度五輪塔と板碑 (筆者撮影)



写真2 岡部忠澄五輪塔 (筆者撮影)



写真3 板碑の断片 (筆者撮影)



写真4 愛宕神社 (筆者撮影)

